

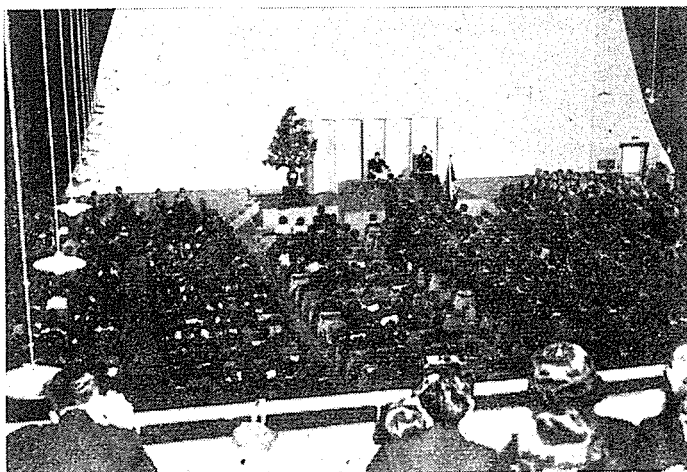
THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, March 30th, 1958, No. 313.

# 關西大學學報

昭和33年3月 第313号

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可  
昭和三十三年三月三十日発行（毎月一回三十日発行）  
通卷三一三号



昭和32年度学士証書授与式

關西大學學報局

## 枯葉舞う

### ノートルダム寺院

海外研究員だより



旅行者は常にも多少とも気狂いである。正常な神経を持つておれば気にもならないはずのこと

が、以前から心に藏していた先入の諸観念と結合して異常に彼を喜ばせ、怒らせ、悲しませる。ちよつと言葉が聞きとれたと思えば無上に嬉しがり、わづかの金の損失に相手国の国民全体が欺偽漢であるが如くに憤慨し、木の葉の落ちるのを見てはヴェルレーヌ以上に秋を嘆じる。すなわち彼は毛穴の一つ一つから吹きこんでくる寒むぎむとした異郷の風を感じつつ胸に大きな拡大鏡をさけて歩いているのだ。しかし興味ある旅行記を書けるのはこの時期で、これを逸すれば、しだいに毛穴がふさがり、拡大鏡が徐々に平面鏡と化してくる。今度、大学から何か書けと望まれた時には、もはや生意気にも凸レンズが平面レンズに移りつつある昨今のこととて、生来の鈍感がさらに近頃のパリの空のように曇つて、一向に筆が進まない。しかし敢えて二三の印象を記してみる。

### ノートルダム

灰色の空のもと、上層部は白く、下部は薄嵐色をし

### 三木治

てシテ島の端にそそり立つこの寺院の格調の高さには心を打たれる。ことにセーヌの川舟から眺める側面から

あの有名な焼絵ガラスがわづかの陽の光をもとらえて五彩に輝き、信仰が蠟燭の焰光にゆらめいている。

一巡して、何はおいてもあの塔上の怪物と面会しな

に経験のあとに幻滅がくる。以前のむやみとあこがれた気持がなつかしい。千八百八十九年作成と書いてある頑丈なエレベーターのなかに「落書すべからず」の掲示が出ています。しかしそのエレベーターの壁にも、頂上の手すりにも無数の落書だ。落書は必ずしもメイド・イン・ジャパンの特産ではないらしい。

### サクレール

くすんだ狭いモンマルトルの路次をのぼる。西側の店は土産物のスプーンやメダルを売つて、五条坂を清水にのぼる感じ。すると突如、まさに突如としてサクレールの純白の大聖堂が眼前に姿を現はす。暗夜に膚の白い大きな女に不意に出くわした驚きも、かくやあらんと思うほどの驚きだ。聖堂に向つて左側にケールカーがついている。しかし切符を買うのも事面倒とえつちらおつちら石段をのぼる。途中でメダルの押売が網を張つていた。「どちらの地方から御参詣で？」ときた。馬鹿めノ眼鏡をかけて、写真機を持つて、背が低くかつたら、たいていどこの国の者かわかつているだろう。

### カダゴンフ 墓窟

入場料三十フランと二十五フランの蠟燭を一本買つてはいつていく。お得意の螺旋階段を地下二十メートルまで降りたところから平坦な道がうねうねと続く。何も無い。ただ単純な地下道だけだ。少し飽きてきて、蠟燭のたつていくのが気にかかる。やがて「止れ、ここより死の国だ」という掲示板に行き当る。うしろから来る人に押されて止まれない。通過すると、さあ、あるわ、あるわ、何万、何十万という人間の手足の骨が、頭蓋骨をまんなかに入れて、ぎつしりと両

### エツフェル塔

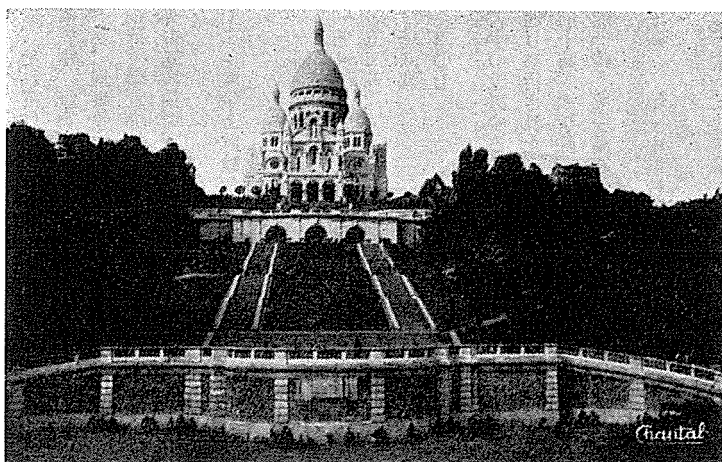
登らざるに如かず。かつてはチョコレート箱の表にさえこの塔の写真を見れば心ときめきを覚えたものだった。しかし世にしばしばある或るこのよう

側に詰めこんである。色はことごとく褐色で、通路に面した骨の端は観覧者の服にすれてか光沢を放っている。そしてところどころに聖書の一節や有名な詩句が額にして挟んである。ラテン語の詩句の下には仏訳がついていた。それみる、フランス人だつて仏訳がなければラテン語は読みにくからうが、と変なところで溜飲をさげる。果てしもない人骨の壁だ。指の熱さがつそう道を遠く思はせる。しかし過ぎたるは及ばざるが如し。厳肅の気はしだいに薄れ、もしこれが鯨節だつたら大した金額だろうと考えたりする。爪に火がつきさうなところでようやく上り階段に達する。地表に出れば珍らしく陽が照つていた。自動車が行り、若い男女が相擁して行きかい、ショーウインドが美しい。ふと気がつけば靴とオーバの裾に点々と蠟が垂れている。さてこれをどうして取つたものかとしばし路上に考えこむ。

## 地下鉄

パリの地上建造物はすばらしい。しかしそれにも劣らない傑作は地下鉄だ。ある大都市の地下鉄のように端の方になつて一本支線の尾を垂らしているのではなくして、十四系統もある線が地下を縦横に走っている。したがつて全市どこに行くにも、地上に顔を出せばほとんど目的地の至近距離まで来ているというわけだ。これでこそ交通機関といえるだろう。そしてたとえ二等車の椅子が木の椅子であつても、たとえ手で開ける戸が吾々に重すぎるとしても、あるいは電灯が昔なつかしいタングステンという「あやとり」の組みたいなものであつても、また大きな乗換場所では乗るために歩くのか、歩くために乗るのかわからぬほど歩かされても、あるいは通路に何のために設けてあるのか

今もつてわからぬ鉄棒で腹をたたかれても、あるいはまた少しくフォームのカーヴしている駅では女駅手が乗降客のすんだことを、妙見さんの太鼓のようなものをふりあげて合図するという古風な姿を見せられて



聖心会堂(パリ)

も、依然としてこの地下鉄の設計の巧みさは地上のどの建築物にも劣らない傑作だ。さらに地下鉄に乗る楽しみは、車内に出ている節酒の勧告掲示だつた。「アール中に陥るな」とか「一日に決して一リットル以上は」とかを始めとして様々な文句だ。そしてさらに面

白いのは地下鉄の駅にはどの駅にも酒の大きな広告が出ている。「真水は蛙に残してやれ」などずいぶん手きびしい。きつとも地下鉄は節酒と爽酒の戦を演じながらパリの地下を走っているだろう。

(教授、文学部)

(13頁より続く)

- 上層町人による西鶴文学 小西 董明
- 日本永代蔵に現われた西鶴の致富観 小林 治
- 大宰治論 初期の作品を中心に 五次 義次
- 保元物語の儒教思想について 齊藤慶太郎
- 武者小路実篤の文学に就いて 佐々木三郎
- 小林多喜二論 重松 実
- 武者小路実篤論 杉尾 修爾
- 小林多喜二の文学作品について 杉本 勇
- 近松世話浄瑠璃における敵役について 住吉 久美
- 大宰治論 背尾 憲審
- 芥川竜之介文学について 瀬戸 修
- 萬葉集「山部赤人之作、高橋蟲麻呂之歌及び東歌に於ける真間手見奈について」 高橋 範守
- お伽草子に表われた庶民の世界 田中 忠男
- 現代作家を基とした上方文学論 田中宏之介
- 俳人、日野草城論(副論、現代俳句の起点) 谷口 博

(以下次号)

# 学内報

## 定例評議員会

学校法人関西大学寄附行為第十八条第二項による定例評議員会は、三月二十九日(土)午後三時より天六学舎で開催。

昭和三十三年度学校法人関西大学歳入出予算承認に関する件その他につき審議これを可決した。

出席者(敬称略、五十音順)

- 阿部甚吉 池田信之助 今井康兼 岩
- 佐清三郎 植野郁太 浦野健二郎 越
- 智比古市 大島武夫 岡野衛士 櫻本
- 信雄 勝島芳松 桂忠雄 門上敏夫
- 神宅賀寿恵 寒川喜一 川口勇 小寺
- 小市郎 小林巖 白川朋吉 関豊馬
- 高垣善一 竹沢喜代治 寺西武 中務
- 平吉 長尾昇 長柄金吾 浪江源治
- 西尾専太郎 西村治三郎 東浦栄一
- 久井忠雄 平井三朗 深川実 福島四郎
- 堀正人 松尾高一 松原藤由 松
- 村陸鴻 三島律夫 水谷揆一 宮崎平
- 三好万次 村尾静明 村上精三 森川
- 太郎 八百村稔 保井剛一 矢野文雄
- 山崎敬義 横田健一 脇野徳三郎 渡
- 辺正人

## 第三十五回学士証書授与式

関西大学第三十五回学士証書授与式は三月二十日(木)、一部・二部共、法学部文学部が午前十時より、経済学部、商学部が午後二時から、それぞれ千里山第一学舎講堂で、学歌斉唱、証書授与、学長告示(並井文学部長代読)、理事長挨拶、文部大臣その他来賓祝辞、学友会功労者賞状並びに賞品授与等の式次第で行われた。(表紙写真参照)

なお、昭和三十三年度学士試験合格者数は左の通りである。

法学部	一部	二部
経済学部	五七九	二九二
文学部	一八八	二四三
商学部	三〇七	一〇六

学校法人関西大学の設置する関係学校の卒業式も左の通り挙行された。

三月二十五日午前十時 大学院  
 二月二十六日午前十時 第一高等学校  
 (表紙)  
 三月十九日午前十時 第一中学校

## コロンビア大学より 本学教授招聘

昨年十月末来学したコロンビア大学商学大学院長 C. C. ブラウン (Prof. Courtney C. Brown) 教授から本学学長宛、

同大学で行われる マツキンゼイ講義 (McKinsey Lectures) に客員学者 (visiting scholars) として教授を派遣するようにと、招聘して来たので、本学ではこれに快諾し、経済学部矢口孝次郎、商学部山崎紀男両教授を派遣することになった。

なお、マツキンゼイ講義は四月八、十二両日及び五月六日の三回に亘り行われ、デュポン会社 (E. I. DuPont de Nemours and Company) の専務取締役などが講師となっている。

前述のコロンビア大学商学大学院で行われるマツキンゼイ講義に参加のため、矢口孝次郎教授は三月二十八日、山崎紀男教授は三月二十六日「はと」号でそれぞれ出発、日航機でアメリカに向った。

なお、両教授のアメリカ滞在期間は四月一日から五月十五日までで、その間講義の余暇をみて東海岸の著名大学を訪れ、またデトロイト、ピッツバーグ等の著名産業会社、工場を視察する予定。



矢口、山崎両教授  
渡米、コロンビア大学へ

## 私大及私学関係国庫予算

昭和三十三年度文部省所管予算要求額のうち、私大及び私学関係の分をみると次の通りである。(単位千円)

事 項	前年度予算額	昭和三十三年度要求額	比較増△減額
私立大学研究設備助成	八、〇〇〇	一五、〇〇〇	一〇、〇〇〇
私立大学理科特別助成	五〇、〇〇〇	一八、八五〇	一四、八五〇
私立学校振興会出資	一五〇、〇〇〇	五〇〇、〇〇〇	△三三〇、〇〇〇
私立学校教職員共済組合補助	五九、五〇〇	三三、八六六	四、三三六



学友会

昨年十月下旬学友会執行部は学友会委員を解散し、十一月中旬より下旬にかけて委員を選出、十二月十九日、新委員による学友会委員会が開かれ、執行部委員長に岡田尚明(法三)、副委員長に井関吉郎(法三)、上辻勝彦(経三)の諸君を選出した。

関西学生駅伝に優勝

陸上部

関西陸連、毎日新聞社共催関西学生駅伝は昨年十二月十日、神戸三宮駅前、京都平安神宮間、七区七十九、五キロのコースで十六校が参加開催されたが、本学は終始トップをリードし六年振りに優勝した。当日の記録は

- (1) 関大 4 時間 36 分 45 秒 (坂本、吉田、辻、大迫、沢田、高橋、松岡)
- (2) 立命 4 時間 43 分 10 秒
- (3) 近大 4 時間 44 分 32 秒
- (4) 関学 4 時間 48 分 23 秒

全国学生相撲大会に優勝

相撲部

第三十五回全国学生相撲選手権大会は昨年十一月三十、十二月一の両日、大阪府立体育館で行われたが、本学は第二日目団体戦第二次予選に立命、早大、拓大、を敗り、関学には敗れたが、優秀八校のうちに残り、優秀八校トーナメントでは第一回戦日大を 3-1 2、準決勝戦明大を 4-1 1 で敗り、優勝戦に進出、関学を大将同士の決戦で本学寿が関学横山を浴びせ倒して破り、ここに三十三年振りに全国制覇を遂げた。

関西学生ボクシング秋季リーグ戦に優勝

拳斗部

昭和三十三年度関西学生リーグ戦最終日は昨年十一月二十五日、大阪府立体育館で午後五時より行われたが、本学は近大を 5-1 2 で敗つて 3 勝 0 敗となり、一部で優勝。新形式一部、二部制による秋のリーグ戦に初制覇を遂げた。

司法試験をかえりみて

昭和三十三年度司法試験に合格した人々に、その受験の体験談苦心談を聞くこともまた、後輩の誘掖に資するであろう。

浜本恒哉

よう M か、驚いた、変なところで会うじゃねえか、え、いや有難う。まあ何とかね。なに、うん、そうか、おめえも来年受けるのか。え、そこで俺に話があるつて、おい、こんなところで立ち話もできやしねえ、そこらで一パイやろうじゃねえか。

ところで話つてえのは、え、なに、合格の秘訣と体験を語れだつて、こいつお笑いだ。人ごみに押されて、揉まれてさ、そのうち何となくフラフラつと櫓の上にとび出しちまつたてな、とんだ三角野郎によつて、こりや多少の謙遜もあるがね、へッへッ

しかしどつちにしる体験談なんてあまり役に立つもんじゃねえんじやねえかな、そんなことぐらいわかつてるつて、この野郎、

兎も角だ、要するに毎年二百何十人か人間が必ず経験するつてな全く月並な事実さ。たまたまその中の一人に入つたからつて別にどうつてこともありやしなさい。けども俺にとつちや五年の青春をつぎこんだ高価な代償だもの、嬉しかつたさ、嬉しかつたよ。学校時代酒ばかり呑んで、就職して

から、こいつあいけねえ、そんでやり始めた御承知のトシ野郎だもの人様より余計苦しんだかも知んねえよ。  
「腹からの笑といえど悲しみの底にあるべし」  
なんて柄にもなくゲーテのミニヨンの歌をしみじみ口ずさんだ宵もあつたつて、今になつて見りやいい思い出だけど……

しかしねえ、合格つて反面いやに淋しいもんだ。俺みてえに勤めながらやるものにとつちやあ五年つてえのは常識だそうだが、その間一つものを抱き続けたりやあ体の一部になり切つてしまつたよ、それが合格と同時にフラフラとどこかへ蒸発してしまふ。ぼつかりと穴があく、そんな感じさ。ちいつと古い文句だが体の中を風が吹くつて奴さ。ニイチエのよきう「別離の時」つてえのもこんなものかも知れねえよ。そうだよ、おめえのいう通り矛盾だよせい沢なセンチメンタリズムさ、だけど人間つてそんなものなんだねえ、

わかつてるよ、おめえに云われなくつたつて、これからだつてことぐらいい、これでも俺は俺なりに張り切つてんのさ。え、なに、あ、そうだつた、忘れてた、体験談か。  
さてと、弱つたね、どうも苦手なんだよ、ありふれたこたあツマンねえし……

おい、まあ一パイ呑めよ。

そうだねえ、逆説的な云い方をすればだ、書くまいとする努力つてえのが必要じゃねえかなあ、どういう意味かつて、うん、つまり詩だよ、わかんなえかなあ、あのねえ、俺たちなんてのは法律のぬしみてえな試験官の前に出りや吹けばとぶよな木つ葉野郎さ、そうじゃねえか、そんな俺たちだよ、なまじつかな智識をふり廻して微細にわたつて説明しようなんだ、およそ的はずれのコンコンチキさ、ナンセンスだよ、そりやあ人情として知つてることあみんな書きたくならあね、だけれどもよ、そんなことしてりやあ自然にアラも出てくるしミスも多くなるうつてものよ、その上文章全体の調和つてえものがなくならあね、ツマンねえことに力が入つちやつてき、そうなりや、こいつおポイントつてえものがわかちやいねえでんでチョンチョンのオシマイてえのがオチさ。

偽悪的に誇張していえばだ、沈黙によつて試験官を欺陥しようつてえのよ、暗示によつてわかっているなど思わせて点数をかせごうつて料簡なんだ。

おいおい、聞いてやいねえのか、どこ見てるんでえ、ちえつ、それがおめえの悪い癖だよ、ちよつと綺麗な娘が通るとすぐこれなんだ、そんなこつたあ来年もおぼつかねえぜ。何、俺もだつて、俺はいいのさ、合格しちまつたんだもの、へツヘツヘツ

とこころでと、どこまでだつたつて、あ、そうかそうか。

去年おらあバリバリ書いてやるうと張り切つてたんだ、知つてることあみんなね、お陰で見ん事失敗したよ、それで今年は宗旨がえき、五枚以上は絶対に書く

まいと誓つたね。ただ山のあつた憲法の表現の自由と刑罰の筆証責任とは残念ながら制限を超えちまつたけれど……民法の婚約と内縁にしても定義と判例とを充分書いておきやあ後の具体的相異点などホンボン列挙するだけで説明なんかいらねえと思うんだ、重複だよ。学説の発表会じゃねえんものな。

わかるかい、ちよ、頼りねえ願してやがる、え、なに、まだ外に何かねえかつての、かい、おめえみてえな顔されるど話す意欲がなくなつちまうじやねえか。

じゃあね、フォルキユスの娘になるなつていいたいね。なに、俺は娘じゃねえつて、あーあ全くいやんなつちまうよ、あのねえフォルキユスの娘は自分の眼珠を失つちまうんだ。どうしてつてか、そんなことあどうだつていいことなんだ、ちよつと黙つちやいねえか。

そこで娘は自分の眼珠を求めて荒野をさまようんだ、だけれども自分に眼珠がねえもんだから見付かりつこありやしねえ、永遠にね。どうだ可哀そうだろう、なに、惚れたのかつて、

馬鹿野郎、下手な洒落だよ、三四郎じやあるめえし

つまりね、自分の眼で見なきや何も見付かりやしねえつてことよ。

例えば商法の会社支配の問題さ、あんな問題見たこともねえよ、大抵の奴はそうなんだ、そして大抵の奴は同じく、その智識しきや持つて大抵の奴は同じく、そうすりや後は同じような智識源から問題の本質に適合する箇所を抽出する能力と抽出されたものを体系的に敘述する能力とにしぼられてしまうじやねえか、

そうだろう。

司法試験つてえのは単に智識の試験じゃねえつていうんだ、必要な論理だよ、なに、どうすりやいいかつて、だからさつきからいつてるじやねえか、フォルキユスの娘になるなつて、受け売りは駄目さ、自分の眼で見るのよ、自分の頭で考へるのよ。考へながら読むのよ、それ以外に方法なんてあるものか、

まあ、最後に俺をしてい、わしむればだ、一日に何時間勉強するかとか、一時間に何ページ読むかとか、サブノート是非か、なんて論議ぐらゐ愚劣なものねえと思うんだ。そんな心配するぐらゐなら酒でも呑んで寝ちまう方がはるかに気がきいてるつてもよ。

おいどうしたんだ、ちえつ酔つてんのか、相変らず弱え奴だ、じゃあぼつぼつ帰ろうか。(学一法・昭和二十七年度卒)

### 米田 泰邦

私が司法試験に合格したのは一つの奇蹟であつた。というのは、私が受験を思ひ立つたのは五月の中頃雑誌の中で友人に冗談まじりにすめられた時であり、二ヶ月という限られた期間の準備で受験したからである。元々大学院に進んでこの様な受験準備をするのは邪道だという人もあり、事実大学院での研究を真面目にするならその余裕もない筈なのであつて、まして学校から給費を受けている私にとつてその様なことは許されぬと信じて公言していたものであるが、丁度その時修士論文の草稿を半年がかりで一応纏め上げていたし又特殊の個人的理由もあつたので無謀とは思つたが敢てその決意を固めたのであつた。合格するとは夢にも思わなかつたので受験の事は固く秘めていた為私の合格を知つて驚かぬ人はなかつた程であつたが結果的に言つて、これは他人の成功や失敗を聞いて不必要に落胆したり上つ調子になつたり、或いは合否について人の思惑を気にしない点で良かったと思う。

何分僅少の余裕であり、幸い大学院の二年次では授業は殆どないのでその日から直ちに他の凡ゆる仕事を中断して準備に打込んだ。参考書は殆ど借物だつたが、憲法は法学協会・註解二巻、民法は我妻・大意上中下、商法は石井・商法(海商、保険は除く)、刑法は植松・刑法概論、民訴を弘文堂の兼子・民事訴訟法、刑訴を団藤・刑事訴訟法綱要、行政法は田中・行政法上下、でそれ以外は事実上読み得なかつたのであるが全く利用しなかつた。

そして第一回は精読してポイントを赤鉛筆でチエツクするという方法で大体一課目一週間の予定で六月一杯で一通り終え、第二回は七月初めから精度を落しチエツクした箇所を辿つて一課目一日半の速度で十一日迄に全部読み上げ、後の二日間には六法の条文のみ読んでこの二ヶ月のスケジュールを終えた。この間最も効果的に読書出来る様に睡眠時間は十分に取り、日中でも疲労を覚えるとすぐ午睡なりラジオを聞くなりして休養をとり高度の注意力を保つ様にした。唯、六月下旬に一度気分転換という口実で南極大陸という映画を見に行つたが、これは余り休養にならなかつたと思う。私の場合自炊をしている関係もあり、一日八時間程度の読書が限度であつた。

最初の択一試験は全然判らなかつたものの確信のなかつたものが二十題でその内後から調べて正しかつたものもあり、択一の合格の基準と聞いていた七十題中四

十五題を超えて先ず幸先の良いスタートだった。根本的な理論的対立の少ない商法や手続法に六法を読むことが割に役立つことなど学部を出る時に合格した六級職試験の体験が役立つと思う。論文では細部の誤りも多かつたが、特に刑罰の破毀自判の問題では控訴審での判決調の不要な場合を知らず特に実体的判決のみ許されることなど、ひどい出鱈目を書いて全く絶望した様な有様であった。唯論文は作文能力と構成が大きな比重を持つが、典型的な問題の答案練習など全然できなかった私は、専ら基本的な問題を論じ大きな視野から設問に対する概括的な帰結を導びく様にしたが、市販の模範答案集に見られる様な答案を書く程の正確な記憶の欠ける時には良い方法ではないかと思う。例えば代理権の制限の問題であれば、これが表見代理・無権代理の制度が取引安全の要請から第三者保護を志向するに反し、専ら本人の保護の為の制度であることを代理制度の社会経済的機能と絡ませて論じた後で該当条文の簡単な説明をするといった仕方である。だから私は典型的問題では失敗した反面応用問題では余り慌てなかつた。従つてもし時間的に余裕がなければ少くとも論文問題に関する限り徒らに細かい概念規定の暗記に時を潰すよりは個々の制度の背後にある法の理念が目的を確実に理解する方が良いのではないかと思う。

九月の下旬に筆記の合格通知が来た時それ迄論文の手入れや他の就職試験にかまけて司法試験に関する限り全然白紙でいた私は大いに狼敗した。一週間程の余裕は始めて受験の手引を借りて読んだり修習生の方の話の聞いたたり只うろろする許り何も手につかない儘十月四日から口述に臨んだのであるが、これが又無惨な結果であつた。つまりここで横着な受験準備の報いがあつたのである。先ず刑罰の三二一条一項の解釈、民法では諾成消費貸借の性格・債権の効力、商法では全然読めない失敗をした小切手の細かい問題で惨めな失敗をしたのであつた。確かに口述では全体の見通しの他に細部の知識の必要なものが多いと思う。例えば刑法の過失教唆の問題などの確な解答を出す為には通り一辺の参考書の理解では足らず難解な共犯理論の隅々迄に亘る研究が必要なのがその例である。特に試験委員の学説と異つた為であろうが刑法読本一本でやつた人は反対説を足場に相当いためつけられた様である。今秋の刑法学会で証人を探ねられて商人の概念規定を答えた者が居たと試験委員の方が皆を笑わされていられたが、あの六日間の心身の苦渋や答えが出ずに思考作用の全く停止した様な頭を抱えて徒らに机の表面を眺めていた時間の耐らない重圧感を身近に体験した私には他人事とも思えず、渦巻く洪笑の中で身につまされた様な想いだつた。だから口述の終つた翌日の五時合格を知つた時の嬉しさは筆舌に尽し難いものがあつた。

今振り返つて見て私のこの変則的な準備による合格は全くの僥倖であり、も一度繰返して果して同じ結果になるかどうか心許ない。だからこの様な私の体験がどれだけ受験生の方の参考になるか甚だ疑問だと思ふが、少くともこれは結局受験準備は夫々の人がその個人差を自覚して自分で最も効果的な方法を探る他はないという事の証左であると思ふ。例えば一日十数時間も読書する方もあるという

が、それだけの耐久力の欠ける者にとつてその様な方法は寧ろ逆効果である。サブノートも作らぬ人が可成りある様である。最後に私は私の場合泥縄式の形式的な準備より学校の講義から得た知識や平常の広範な読書の中から身に前つけた緻密な方法的思考方法としてそれを前提したという方法を最も強力な武器であつたという事を強調しておきたいと思う。語学一つにしても司法試験には直接には無縁であるが、それが表現の論理的な正確さを獲得させる点では計り知れない利益があると思ふ。そしてこの意味では私の合格は単に二ヶ月の準備によるものとも言い切れないであらう。

### 長山 亨

体験談などと口幅つたいことを書く積りは毛頭ない。ほんの一寸した日記の積りで書く。それで、唯単なる呟に終るかも知れないし、また、一人よがりになる虞れも充分にある。その点は、ペンの走りの思うことを充分表現するだけの才能を持合せないからだ。ところで、司法試験受験の動機はと問われると、一寸返答に困る。もともと「立派な法曹になりたい」とか、「正義の実現に一役買つて出る」とかいつた類の殊勝なものではないから。直接の動機と云えば、就職試験の惨敗と、それに絡んで劣等感の克服の必要性、この二つだつたと思ふ。もつとも、以前……三年次頃だつたらうか……法曹になれば素晴らしいだろうと、途程もない憧れはあるにあつた。それも唯、なんとなく「いいだろな」という位の程度で、あまり判然とした形をとつていなかつたように思う。それに、法曹への登竜門として司法試験の制度があることは、友人達から聞くには聞いてはいたが、「司法試験は難しい。最少限三年間の受験勉強が必要だ。それでも合格は保障の限りでない。いい所があれば就職した方が無難だ。」ということを目にしては、自から足を踏まざらぬにはいられなかつた。このために陽炎にも似た淡い憧れは、いつしか諦められ、忘れ去られていた。その当時の客観的条件も芳しくなかつた。高校から大学まで夜間で学ばなければならぬ状況にあつたし、卒業後も受験勉強のための余裕も見込がなかつた。二部から一部への転部も、功利的だと非難され、譏られる向もあるが、就職のときの好条件を確保するために過ぎなかつた。このような訳で、学校での専門科目の講義には大抵聴講したとはいふものの殆んどその場限りで間に合せ、専ら自分の好きな小説や、政治状況、経済状況に関する論文や、評論めいたものを手当り次第に読んで時間潰していた。就職試験のことには就いては、何故だか今だに知り得ないが、「自分は大丈夫だ。」という滑稽な自惚があつた。しかし、この自惚も、砂の上に築かれた楼閣として、必然的に崩壊する運命にあつた。面接試験でもその見事に破壊された。このときの心持は、今になつて思出しても情けない。自惚……よく云えば自信といえようか……は………に砕かれ、打拉しがれ、押潰され、自惚によつて維持される者の傲慢さは後形もなく、劣等意識の中で呻吟する一人の男の惨めな姿だけだつた。日頃の怠惰に対する後悔の念と、その結果に対する自嘲の

念で複雑怪奇な気分だつた。この敗者と  
しての劣等意識を何等かの方法で払拭し  
なければならなかつた。そうでないと、こ  
の無意味な劣等意識に生涯苦しめられ、  
辱かしめられ、悩まされる真れが充分予  
感されたからだ。悪くいけば自分の生命  
の維持すら……と思うと、冷いものが、背  
筋を走り去るのを覚えずにはいられたか  
つた。劣等意識克服の方法として具体的  
にはどれといつてよい方法がないようだ  
つた。「司法試験受験。」が頭に浮かんだ  
のは、丁度このときだつた。「これならば  
目的は達せられるようだ」一寸、手強い  
が高嶺の花という程のこともあるまい。  
骰子をふつた積りで頑張つてみよう。」  
と決心した。動機はかような願を追つ  
て形成されたもので、窮余の一策に過ぎ  
なかつたと云えるようだ。……(しかし、  
今では良識ある法曹になりたいと望んでいる)

「受験」の決心が明確になつたのは、  
既に秋も終りに近く、落葉の季節といわ  
れる十一月も末に近かつた。翌年の試験  
まで僅か七ヶ月余りしかなかつた。「こ  
れは到底無理だ。」という悲観もあつた  
が、ここに至つては、前へ進むより  
方法がなかつた。それで「七ヶ月間で必  
ずモノにしてみせる」という覚悟で頑張  
ることにした。アルバイトもしないこと  
にした。それでも、二月までは、学期末  
試験のため思う通りにはできなかつた。  
……全学年を通じて、最大限の単位数を  
とり、しかも、不合格となるのは馬鹿く  
さいとの変な観念も手伝つてか……。そ  
れでも、元来、読書は好きな性質だつた  
し、かつて加えて、毎日、一定のペー  
ジ数を繰らないことには安眠できない奇妙  
な性癖もあつたか、まあまあという所  
であつた。今に思えばこの奇妙キテレツな

性癖が、受験勉強に意外の効果を發揮し  
たように思われる。小説、隨筆等文学的  
著作ならいざ知らず大抵の法律書は生硬  
な文章で書かれ、しかも専門用語の連続  
であるため、容易に馴染みにくいものだ  
と云われているが、比較的苦痛になら  
ず、他の書物と同じような速度で読めた  
からだ。それでも、乱読の常として、身  
についたものとは何もなかつたことを  
反省し、心して精読に努めた積りだ。つ  
まり、基本書として撰択した本は、繰り  
返し繰り返し読み、反対説の通説にも努  
めつつ、しかも、著者の基本的立場をで  
きる限り正確に把握し、理解力を深め、  
頭の硬直性と随性を匡正し、柔軟性と応  
用力を涵養するために、著者の書いた論  
文、エッセイ等を時間の許す限り読んで  
来た。今から思えば、一般的にはどうか  
知らないが、私に關する限りでは、この  
方法は、大いに役立つように思われ  
る。勉強方針は、全て予め立てた計画通り  
に進めていつた。「受験」を決意して翌日  
から、手をつけられない儘に本箱の片隅  
で埃を覆つていた幾冊の本をとり出し  
たときは、何とも譬えようのない緊張を  
覚えたものだつた。

それ以来、全く、譬通り、蒲鉾的な生  
活が始まつた。それまで、金の要らない  
遊場位にしか考えていなかつた日曜日の  
答案練習会にも真面目な気持ちで出席す  
るようになった。しかし、気は焦るが、理解  
は遅々として進まぬ。答案練習にても  
も書けないことがあまり多く、黙つ  
て坐つているのも何だか居心地がよくな  
いので、途中からこそそと逃げだした  
ものだつた。こんなことも一度や二度は  
「誰だつて書けないことも一つや二つは  
ある」といつた所で済ましておれたが、

再三再四に及ぶと、「俺は絶対に駄目だ。」  
という劣等意識が容赦なく頭を擡げて来  
た。その度に自分の頭の悪さを呪い、自  
嘲し、果ては止めて終うかとも考えたも  
のだつた。それでも、兎にもかくにも、「  
やればできるかも知れない。可能性が失  
うたつた訳ではない」という漠然とした  
自惚にか、その危機を乗り越えることが  
できた。

理解力は、依然、遅々として進む様子  
はなかつたが、何とか机に留めて頑張つ  
ていると、学校も、どうにか卒業し、緑春  
の季節に近くなつた四月の下旬頃から少  
し解り出したのではないかという気がし  
て来た。この潮時を見逃したら絶対駄目  
だ。充分活用することだ。いや、十二分に  
活用することが第一だと考えて、これま  
で読み続けていた小説も止め、睡眠時間  
も数時間前後に短縮し、その他の雑用も  
極力避け、可能な限りの時間を法律書の  
読破に当てた。受験勉強を初めてから幾  
許にもならないのでこの上潮時に時を稼  
ぐのが最も有効、適切な勉強方法だと考  
えられるし、これなくしては、合格も凡そ  
縁の遠い話したとの懸念もあつたから  
だ。もつとも、健康状態に就いては、あ  
まり頑健な身体を持合せないので非常に  
心配だつたが、背に腹は替えられぬの譬  
え通り、身体の調子が崩れ、精神力を以  
つてしても維持できなくなるまでやる積  
りだつた。しかし、この心配は取越苦勞  
に終わった。身体の調子には至極良好で、つ  
いぞ寝込むようなことはなかつた。それ  
でも、頭の酷使は、始終、絶え間のない  
軽い頭痛となつて現れ、目の奥が、錐で  
もまれるようにずきずき痛むときが度々  
あつたが、これも睡眠をとればよくなつ

ていた。孫悟空じやないが、頭に硬い金  
輪を嵌められ、締めつけられたような変  
態な感じは試験が終わるまで、すつかりと  
れてなくなることはなかつた。こんな状  
態ではあつたが、日曜日の答案練習会後  
の時間は、休息に費し、寛ぐことにして  
いた。さもないうと、精神に異常を来すよ  
うなことがあつては大変だと思つたから  
だ。少し大袈裟だが……。

試験のときは受験勉強の期間は短いけ  
れど、「よくやつた。」という気がして案外  
気楽だつた。答案も自分が懸念していた  
よりも、よく書けたように思う。それで  
も、一間殆んど点にならないだろうと思  
われるのがあつたので、これが致命傷に  
なるだろうとの心配があつたし、後に本  
を繰つてみたら、消極的ミスが続出、今  
年は、到底、駄目だ。」という観念が支配的  
になり来年までのことを考えると、だん  
だんふさぎ込んで終つた。ついに、全  
く逃げ道のない壁際に追い詰められて終  
つたようだつた。

このような訳で、半ば諦めて、二ヶ月  
間無為に過して来たが、九月の二十五日、  
合格通知を手にしたときは、全く狐につ  
ままれたのではないかと思つた。暫時の  
間は、喜んでいいのか、どうか、複雑な、  
くすぐつたい時間が流れた。虫の良すぎ  
る話ではあるが、事実が、明らかに証明  
するから疑う余地がなかつた。本当だと  
解つて、「ホツ」として、不思議と合  
格格のもの喜びは大した湧いて、こんな  
つた。あまりにも、あつてなくて、済ん  
で終つたからだ。その反面、劣等意識は、  
ものの見事に克服され、「やればできるん  
だ。」という自惚とも、自信ともつかない  
力が腹の底から込みあげて来るのだつ  
た。しかし、傲慢不遜なかつたの自分に



復帰するようなことは二度とないであらう。所で十一月の十五日に、合格証書を貰った。席次も付いていたが、思ったよりよい方だったので、司法試験といえど難攻不落の牙城の如く云われているが、案外、他愛のないもののようにも思われた。しかし、昔の高文だといわれるのだから難しいのには違いないのだから。唯私の場合、あまりにも運が良かったので、結局、運が私を合格せしめたと解釈して置く方が無難だろう。

扱て、ペンを置くに際して野暮な事ながら勉強中に極力気をつけた点を簡条書にしておく。

① 基本書の撰択をした場合、その著者の立場を明確に理解するため、著者の論文、雑筆等もできるだけ読むこと。

② 部分的理解に偏ることを避け、应用能力を養うため、特定科目全般から考察すること。……(他の科目との関連は実務上必要であるが、重要なものだけ知っていればよい)

③ 理解していても表現ができなければ無に帰する虞れがあるから、理解力を充分發揮できるように表現方法を考えること。

④ 一応理解したと思つても、一人よがりなことがあるので討論の場を多くもつこと。

⑤ 「絶対に自信を失なわないこと」これが最も大切なものである。

⑥ あまり先を急がずに着実に積重ねること。「急がば廻れ」

尚、末筆で失礼かとは存じますが紙面を借用致しまして、諸先生方、及び先輩諸兄姉の日頃の身に余る御指導に対しまして御礼申し上げます。

(学一法・昭和三十一年度卒)

### 津村節蔵

一、司法試験に合格した現在、その受験勉強時代をふり返るとあの苦しむことがなつかしく且つ楽しく思えるのは不思議である。かくいえば現在受験勉強で苦しんでいる諸君はこの苦しむことと合格してでも絶対になつたこの苦しむこと、楽しんだりすることの出来る性質のものでないかと問われるかも知れないが、この気持は合格すれば理解するでしょう。受験勉強時代を苦しめば苦しむほど合格の喜びが倍加するものである。諸君は喜びを味わいたいならもつともつと苦しみたまえ。この苦しむは喜びに変化する性質をもつものであるから。その証拠によく合格生が「司法試験位は簡単に苦勞なくしてうかるよ」というのは彼の受験時代の苦しみが合格により喜びに変化したことをあらわすものであり、決して苦しまなくて合格したことを意味するものではないのであつて、かえつてこのような合格生ほど苦しむ努力し合格した人達なのである。

さてこれから述べることは私の苦闘記であり、反省記であります。

二、私が法曹にならうという希望を持つたのは関大入学時からであつた。この希望実現のためには努力をしなければならぬとは決意していたが大学生になつたという安心感と解放感とでこの決意はずいづか弱まつてしまつた。学校は休まずに出席はしたが勉強は身が入らず浮草のような生活をしているうちに一年生二年生と夢のうちに過ぎ三年生となつてしまつた。今その時代をふり返つてみてはつきり記憶しておらず、本当にぶらぶらと過ごしてしまつたように思われる。こ

の二年間を無意義に過ごしたことが司法試験を現役で合格し得なかつた最大の原因となつたのである。私のこの大失敗はいまでも悲しく思うのである。さて三年生なりこの大失敗に気付いたのです。考えてみるに司法試験は毎年七月にあるのであるから三年生の時の試験までにはあと四月月弱しかなく、従つて今年駄目だ。来年の四年生の時の試験しか仕方がない。ところが四年生の時の試験とて一年六月月弱しかない。一年半位の勉強で合格出来るとは考えられない。一時は悲嘆にくれたが、もうこうなれば全力を努めて勉強するしか方法はないと決心した。丁度この頃毎週日曜日天六学舎で関西大学法学研究会の主催で答案練習会が開かれておるのを聞きこれに参加してもらつた。この答案練習会に入会したことが今回の合格の最大の原因になつたように思われる。しかしこの日から私の苦しみの生活が始まつたのです。というのは学校の授業と研究会との勉強との両方をしなければならなかつたからである。その上家が和歌山であり学校までは片途二時間半位はかかり一日のうちの五時間は交通機関の中ですごさなければならなかつたからよけい苦しかった。従つて学校へ来た日には五時間もかかつて来ているのであるからという気持ちで専門科目を自分の履習している科目のみならず四年生配当の科目をも開けるだけ聞き、その上天六学舎で夜間の授業までも聞きました。答案練習会では憲法、民法とかいうふうにな各科目ずつ区切つてやつていくのですが大体一週間は三〇〇Page位を読まなければならなかつた。そうすると僕のように遠い所から学校へ通う者にとつては全部読めない場合が出て来

る。勉強しないで研究会へ出ると討論することが理解出来ず時間が無駄になるのみならず、講師の方に強く叱られた。従つて是否とも全部読まなければならぬが時間が足りない。かといつて睡眠時間をけずることは健康上よくないからと考へてみるに毎日の交通機関内の五時間位があいていることに気付きこれを十分に活用することにした。車中では座つてるときも、立つてるときも片時も書物を離さず読んだ。あまり夢中になりすぎて駅を乗り過ぎたことも度々あつた。答案練習会に参加して初めての一月一日が日曜日だつた。母が一月一日位はゆつくりして遊んだ方がよいだろうといつたが僕は合格するまでは正月も何もない、合格した日が僕の正月だと心に誓つて答案練習会に出席した。驚いたことには友達で休んだ者がなかつた。皆んな合格の日が正月なのだと思つておつたのである。この内の大部分が三一年度、三二年度の司法試験に合格した。彼らは今毎日毎日の日曜日が正月の連続である。さて話はそれだが、このような調子で勉強していくとすこしずつ法律が分かるような気持ちになり、法律に対して興味がわいてくるようになった。それが反映したものが答案練習会の成績もぐんぐんと上昇して来た。成績の上昇に気を良くして一層勉強に励んだ。三年生の時の学期末試験がおとすれたが、特別の勉強もせず司法試験を受けるつもりで受験した。四年生になり未修得科目は法理学だけとなり、時間の余裕が出て来たので全力を試験勉強に注いだ。この頃になると答案練習会から返却される答案には「合格確実な答案です。合格を折る」との趣旨のことが書かれてあるよう

になつた。ついに七月の十五日が到来し、自信を持つて試験にいどんだが、初日の憲法の予算と法律との関係という問題で大破してしまつた。あまりの緊張であがつてしまつたのと、まだ本当の実力がついていなかつたからである。戦意を喪失して試験を放棄して帰ろうかと思つたが来年の準備として頑張ろうと思ひ直し最後まで受けたが結果は勿論駄目だつた。ところが厄介な問題が生じて来た。というのは就職の問題である。

就職するか浪人してもう一度司法試験を目指すかである。私は両方をかけてみた。就職試験を次々と受け最後に某会社に内定したがこのことを研究会の講師に話すと「今までの苦勞が無になるではないか、もう合格圏内に入る実力を有するのだからもう一度頑張れ」との激励に意を強くし、司法試験一本に決意した。しかし浪人すると心のよりどころがなくなるのを恐れて大学院に籍を残した。今度こそは死んでも合格するのだとの決意もえて三十二年七月試験にのぞんだ。結果は合格した。

三、司法試験は現役特に四年生の時に合格するのが理想的であり、且つ絶対に必要だと思ふ。就職して受験することは非常な困難を伴うであろうし浪人することも経済的面においても社会的評価の面においても色々苦勞を伴うからである。司法試験は計画とそれを実践する精神とさえ有するならば現役で合格することは可能であると信ずる。それにはまず入学時において周到なる計画を立て、日々それを実行すべきである。この一年生、二年生の期間を無益に過ごすならば現役での合格は困難であろう。一年生、二年生には教養科目の配当があるが、この教養

科目を絶対におろそかにしてはいけな。試験勉強のために教養科目を無視する風潮があるがこれは敵につしむべきである。法曹は円満な常識人を要求するからである。司法試験科目に教養科目を入れるべしとの議論が存するものもあるからである。かかる議論が生じないようからである。かか受験生諸君は教養科目を重視して頂きたい。教養科目を十分勉強したとしても専門科目をする時間の余裕は存すると信ずる。一年生の時は配当科目として法学概論が存するが、これは法律全体の理解の基礎として十分勉強すべきであると思ふ。時間の余裕をみつければ憲法、民法あたりをすこし勉強されるがいい。二年生になると配当科目として憲法、民法、刑法があるがこれを十分勉強して三年生になれば他の科目に追われるから二年生の中で完全に理解出来るように努力すべきである。三年生になれば刑事訴訟法、民事訴訟法、商法、行政法と配当があるから、これに全力を注ぐべきことは勿論である。四年生になつてから試験までの四ヶ月間は以上で勉強したことをまとめなければならない。次に答案練習会に入り答案を書くことが必要である。試験官は書かれた答案を通して受験生の実力を判定するのである。だから受験生は答案にうまく自分の知識才能のあるところをあらわし、それを試験官に認知させなければならぬ。このために答案技術を修得する必要がある。形式的には文字をきれいに書くことであり、誤字をなくすることも必要である。次に簡にして要を得た答案を書く必要がある。試験官は一四〇〇前後の答案を見るのでありあまりくどくどと書かれておれば読む気はしないだろう。試験官

の立場に立つて答案を書くようにする必要がある。又如何に自分では理解していると思つてもいざ筆をとつて書こうとすれば書きにくいことがある。これは結局自分で理解していると思つても本当は理解していない結果なのである。それが書くことにより知識が正確に整頓されていくのだと思ふ。次に毎日曜日研究会があるのだからそれに出席するためには是が非でも勉強しなければならぬから良い刺激になると思ふ。又午後の討論で自分の表現力を訓練し、誤解を発見しポイントを知ることについては絶好の機会である。又研究会で良き友達を見つけ相互に激励し合うのも非常に有益である。特に今年の試験においては答案練習会で練習した問題が数題出たがこれなどは非常に有利である。

書物を読むときは書いて読むことが大事である。ともすれば暗記しがちになるがこれは有害無益である。広い視野に立つことも必要だ。ある問題が出されると例えそれが民事訴訟法の問題であれば刑事訴訟法との関連に立つて考え、次に実体法との関連に立つて考え、最後に民事訴訟法の全体の立場から考えて行くのである。次にどんな問題が出ても原理原則に立ちもどつて考察すべきである。こまかい解釈論は我々にとつては不要である。原理原則からの説明で十分である。次にある主張をするには必ず理由を書くべきである。理由のない主張は相手に対して説得力がないであろう。試験場に臨んでは全力を尽くすべきである。どんな簡単な問題が出てもしじつくり考えて書くべきである。早合点は禁物である。試験官がこれとこれとを書いてほしいと思つて出題するのである。従つ

て受験生はすばやくこの出題の意図をつかむべきである。この出題の意図をつかむのに誤がなければ合格点はあると思ふ。時間は最後まで使うがよい。終了のベルが鳴つても答案提出までしばらくの余裕があるから誤字、脱字がないかも一度読み直してみようべきである。試験が終わればあつさり忘れて次の科目に全力を尽くすべきである。すんだ試験にこだわると次の試験の戦意をにぶらすことになる。

筆記試験がすぐでもすぐに口述試験の準備にかかるべきである。筆記試験の発表後口述試験までは十日余りしかないからこのことは十分留意すべきである。私もこれに留意しなかつたために口述試験では四苦八苦しました。

最後に健康に十分留意して下さい。司法修習生採用選考の際に身体検査があります。毎年身体検査で不採用者が出てくるもようでありますから十分注意して下さい。四、以上とりとめもないことを長々と書きましたが受験生諸君の何等かの参考になれば幸いです。では後輩諸君の後に続くを信じております。関大の名誉と伝統のためにも大いに頑張つて下さい。御健闘を祈りながら筆を閉じます。

(学一法・昭三一年度卒)

## 竹内知行

昭和三十年四月に関西大学入学以来二年七月、受験回数一、全くの幸運に恵まれて司法試験に合格した私にとつて体験記等思ひもよらぬところなのですが、高嶺の花と思われている司法試験を在学中に合格する事は決して不可能でない事を知つていただければと思ひ以下乏しい



# 昭和三十一年度卒業論文題名 (1)

## 文学部

文学部では、毎年卒業に際し卒業論文を提出することになっているが、昭和三十一年度卒業論文の論題提出者数は別表のごとくで、また一月十七日迄に提出された論題は次の通りである。(五十音順)

科別	一 部							合計
	英文	国文	哲	仏文	独文	史	新聞	
卒業論文者数	106	85	8	14	2	33	145	5 398
卒業論文提出者数	100	70	7	10	2	30	131	3 353

学科	二 部							計
	英文	国文	哲	仏文	独文	史	新聞	
卒業論文者数	55	51	3	8	1	28	28	1 175
卒業論文提出者数	50	45	2	2	0	25	25	1 150

### ▼英文学科

- シエイクスピアとその時代考察 赤塚 芳彦  
 サマセットモームの人生観について 阿部 泰治  
 作品を通して見たるヘミングウェイの世界 生田 善之  
 on Hemingway's thoughts and view of life. 井野辺光男  
 A. C. Doyle の作品研究 石村 吉郎  
 ヘミングウェイの作品から 岩口 順明  
 (エッセイを中心として) エリヤ随筆集に表わされているチャールズラムの作品論について 上井 昭宏  
 アメリカン・リアリズムに於けるヘミングウェイの性格とその作品 浮田 幸男  
 J. Steinbeck と E. Hemingway の映画化された作品を中心とした作品研究及び比較内容分析 長 幸  
 Hemingway の思想と方法について 内堀 弘  
 Macbeth に於ける悖徳因子とその考察 浦野 喬  
 シエイクスピア作品研究 大野 順弘

- アーネスト・ヘミングウェイと映画に就いて 岡田 繁  
 「アメリカ文学と大衆」 岡野 鏡一  
 Chaucer の Canterbury Tales の Prologue に於ける French Loan-words に就いて 岡田嘉寿子  
 Ernest Hemingway の芸術 岡安 昭吾

### A Study of Somerset Maugham

- D. H. Lawrence 研究 小笹 広  
 John Steinbeck の作品に見る自然への郷愁 奥野 毅  
 ロレンス論—その思想について— 小原 鉄也  
 釜谷 攄藏

### Keats の詩作 "La Belle Dame sans merci" と彼の最後の制作 "The thais is gone" に於ける Roman-ticism

- シエイクスピア文学に於ける女性観 神尾 一己  
 Dickens の研究 川口 浩  
 E. Hemingway, A Farewell to Arms の作品についての研究 川崎 満夫  
 金子 貞夫

### 「Hardy の小説に現われた人物の性格について」

- 特に「郷人の帰里」及び「テス」を中心として— 川畑 則之  
 D. H. Laurence の "Lady Chatterley's lover" の意味 神原 和也  
 ヘミングウェイのフランシス・マロウの短小説に就いて 神田 康行

### シエイクスピアの作品に現われた女性について

- 性について 岸田 清  
 アーネストヘミングウェイの作品研究 岸 直一郎  
 William Faulkner : 作品「エミリアーノの夢」(A Rose for Emily) を中心に Faulkner の技巧 北出 孝継  
 亡霊がホームレットに与えた影響について 北本省二  
 Ernest Miller Hemingway の研究 木野 博之  
 「Uncle Tom's Cabin」に於ける混血児及び黒人の解放についての考察 木村 昌司  
 ウィリアム・サマセット・モーム「人間の絆」について 北村 明弥  
 Charles Dickens 著 "David Copperfield" に示された Dickens の性格 口野 晃  
 Dickens 作 "David Copperfield" の笑いと涙 家間 宣男  
 作品「ハンリー四世」とフォルスタンの性格について 小林 常浩  
 D. H. ロレンスと作品「息子と恋人」に就いて 小山 幹夫  
 Wuthering Heights and Its Foundation 小菊 猛吾  
 ヘミングウェイ文学の骨格とその形成 (キリマンチャロ・マコマーとその周辺) 阪 斉  
 作品マックスに於ける Will, Shall の一考察 坂口 隆一  
 John Steinbeck の of Mice and Men に於ける友情と短篇集より 坂根 弘

A study of dialect in Tess by

Thomas Hardy 佐辺 升

「息子と恋人たち」から見たD. H. ロレンスの側面(人間性とその本質)

佐々木康一

十九世紀の英国に於けるディッケンズについて

芝本 尚明

Hemingway の文体について一研究

相原 徹夫

Hemingway について的小論

直原 秀介

英国地方語の研究

高須賀二男

E. Hemingway, "A Farewell to Arms" のロマンティスムについて

高山 格次

William Somerset Maugham

高山 義雄

ハーディとその作品「ダマハワイル家のテス」

多気田 曙

ローレンス文学の本質的特徴を分析

竹田 真三

Shakespeare に於ける人生と作品の

抜萃 竹歳 邦衛

ジョフリー・チョーサーとロマン

田中 郁子

英語

Prelude, At the Bay and the Doll's House に於ける Kesia の人間性

谷口 文蔵

ジョン・スタインベック文学について

玉川 泰男

ゴールズ・ワージの The Apple Tree

田村 卓郎

「Byron の研究」

津川 秀樹

Aldous Huxley 葛本 清秋

「P. B. Shelley」について 降夫

T. ウィリアム ガラスの動物園 恒本伊佐夫

John Steinbeck の The grapes of wrath について(生と素材な人間像について)

中谷 澄雄

Virginia Woolf の小説における "time"

中谷 礼子

W. S. モームの人間観について

中西 正明

現代アメリカ文学に於ける特質及び

今後の動向 中野 博司

ジョン・キーツの詩の魅力

長島 孝一

ハイロン「抒情詩に現われたハイロンの人間性」

二階堂 隆

Charles Dickens の "A Tale of two cities" に於ける Sydney Carton (C. Dickens) の研究

西野 琢也

Thomas Hardy の女性観

根来 敏子

E. Hemingway 作品研究「武器よおどけ」

福屋 光良

Arnold Bennett と "The Five Towns" について

野々瀬幸男

「シェイクスピアの作品研究」

樋口 祥光

エリザベス時代のシェイクスピア

作品から 広瀬 照夫

Shakespeare 悲劇に表れた女性の消極性と其の悲劇的效果

「Lost Generation」に於ける

平井 弘

E. Hemingway 作品研究

福山 剛

ジョン・キーツ研究

藤本 昌秀

「Walden」に於ける Thoreau の

一考察 堀川駿太郎

トーマス・ハーディ文学の研究

古谷 彰大

ウィクトリア朝文学とジョージ・ギ

ンシンクについて 前田八十八

「怒りの葡萄」の社会的リアリズムを中心として

松王 清志

作品 "Macbeth" に用いられる "For" について

松岡 勉

Oscar Wilde の死と美に於ける一考察

松田 和夫

Oscar Wilde の研究

松田 司郎

ディケンズの研究

溝口 治

G. Gissing 研究

三ツ橋徳之

ワイルドの戯曲「ウィングタミア卿夫人の扇」について

三原 耕治

Infinitive の研究

茂功 慶三

作者としてのロレンスの研究

森 美隆

「ミンクウエイの作品」誰が為に鐘が鳴る」の人間性について

山崎竹三郎

モーム研究(物語性と文体との関係)

山本 堯洋

Thomas Hardy 作品研究

吉川 勉

「Thomas Hardy 作品研究」テスに現われたトーマス・ハーディの人生観

吉田 昭

ハーディ作品に於ける自然主義の探

求 芳松 滋夫

近代英国大衆文学に於ける探偵小説の変遷について

龍神 市蔵

「ミンクウエイと彼の作品」について

竹原 毅

英語という言葉の味

久井 直彦

英語学研究抄論

前原 重見

マクベスに於ける超自然性

宮田 辰男

好色五人女考

足尾 番司

平家物語に描かれた木曾冠者義仲について

有元 国江

西鶴の描いた町人生活

池内 茂弘

清少納言に就いて

井口 松茂

小林一茶論

岡本 昌行

西鶴文学についての一考察

小川進一郎

大宰治の求愛「津軽」を中心に

小野 頼男

元禄文学と西鶴

音田 篤良

山田美妙について

嘉納 広治

西鶴小論

釜江 忍



校友バツチ

# 校

# 友

## 校友会本部の動き

二月

今月は一月に引続いて、本部では役員  
の銓衡をおえたあと、副会長の各部分担  
を協議決定したほか、常議員会を開催し  
て昭和三十三年度事業方針並びに予算を  
審議した。予算案の最終討議は十四日の  
部長会で再審議、一項のみの修正で可決  
され、ここに新予算の成立をみた。

一日 組織部—学友会懇談会・午後六時  
天六評議員室

三日 組織部会・午後五時半、天六旧一  
中室

五日 常議員会・午後五時半、大阪郵政  
会館

五日 宝塚支部総会・午後六時、「宝塚  
荘」・本部から大月会長出席

八日 大阪府庁秀麗会総会・午後一時半  
見本市会館ホテル・大学から白川理事  
長、久井専務理事、阿部評議員会議長  
矢野常務監事、校友会から大月会長、  
門上組織部長出席  
十日 広報部会・午後六時、天六旧一中  
室

十四日 部長会議・正午、カレーヤ

十五日 組織部—二部学友会懇談会・午  
後六時、網笠グリル

十五日 広報部・新聞「関大」第三十三  
号（二月号）刊行

二十二日 組織部正副部長会・午後六時  
網笠グリル

二十六日 組織部—学友会代表懇談会・  
午後六時、天六旧一中室

### 副会長各部分担決定

役員選出を終った校友会では、残され  
た副会長の各部分担を、部長会を開き協  
議した結果、次の通り決定した。  
岡野副会長・総務、財務担当  
榎本副会長・事業、組織担当  
長柄副会長・広報、組織担当

### 常議員会

改選後第二回目の常議員会は二月五日  
（水）午後六時から大阪郵政会館で三十  
九名が出席して開かれた。

当日は坂本氏の司会で始められ、役員  
銓衡最終結果報告、三副会長、五部長の  
紹介挨拶があり、あわせて各部長の事業  
計画をのべた。議事に移って大月会長が  
議長となり昭和三十三年度予算案を審議  
したが、調整を部長会に付託して決定承  
認された。そのあと支部認可の件その他  
案件が討議され、午後八時半終了した。

### 予算、部長会で決定

昭和三十三年度予算は二月十四日（金）  
に開かれた部長会で再検討された結果、  
総額八、八二八、三八〇円にのぼる新予  
算が成立した。

### 三氏 推薦校友に

大阪府庁秀麗会支部長寒川喜一氏から  
本学理事会に申請されていた推薦校友の  
件が承認された。今度推薦校友になつた  
のは、北川石松、佐野浩、橋本親義の三  
氏で略歴は次の通りである。

北川石松・昭25年7月大学部法科中退。現在大阪  
府会議員、今川産業株式会社囑託。大正8年生。  
佐野 浩・昭5年6月専門部経済科中退。現在大  
阪府会議員、昭和初級株式会社代表取締役、大阪  
紡毛初級会理事。明治42年生。

橋本親義・大8年7月専門部法律科中退。現大阪  
府会議員、株式会社共和商會相談役、三上マーケ  
株式会社相談役。

### 伊丹支部総会

伊丹支部では一月十五日（水）成人の日に  
伊丹市緑丘クラブで第三回の総会を開  
催。

会はず会長挨拶、庶務及び会計報  
告があつてから、自己紹介で議事を終  
了、すぐに懇親のすき焼きパーティーを  
開き、会員が旧交を温め有意義な一日を  
送った。

### 当日出席者

深川実、田口正春、甲川巖、磯野充賀、倉橋貞  
一、田原孝平、弦義人、岡本喜允、中平忠、森  
田豊幸、北原逸美、石井清閑、佐野栄二、池田  
宏、森川三男、尾原淳夫、萩原弘

### 朝鮮人同窓会

関西大学を卒業した朝鮮人で結ばれて  
いる同窓会では一月十八日（土）約四十名  
の会員が出席、新年宴会を兼ねて総会を  
開いた。席上役員改選等をしたあと和や  
かな宴会に時をすごし、一同今後の活躍  
を約して散会した。

当日決定役員  
相談役 李曹泰、朴煥時、金東憲  
会長 金晋根  
副会長 唐順化、鄭文一  
幹事長 呉辰成  
会計 高始宗

### 南勢地区準備会

三重県南勢地区の校友が集り南勢支部  
を結成する運動を始めているが、去る一  
月十九日（日）松阪市相生亭で発起人会を  
開き、強力に結成をするよう努力するこ  
とを決めた。また発起人は率先して会費  
を納入し、一日も早く正式認可を得るよ  
う働きかけることになった。

当日出席発起人  
林信幸、生駒孝一、小倉俊三郎、後藤達夫、取島  
光金、中西幸重、真柄尚忠、松本正美、湯浅竜門  
時田早苗

清友会(昭三会有志)

昭三会有志で組織されている清友会では一月二十五日(土)春季親睦会として泉郷有馬へ清遊した。一行は有馬・中の坊ホテルにおちつき夜を徹して歓談、湯のけむりも豊かな有馬情緒を満喫し、親睦の意を深くした。

一泊した一行は翌二十六日大阪駅まで揃って帰着、次の会を約して散会した。

出席者  
小寺小市郎 伊東太平 林豊吉 湯浅吾一 原淑  
二 丸木利喜造 大島峰太郎 南清

浪速支部発会式

浪速支部では一月二十七日午後六時から大阪市浪速区役所に於て支部発会式を挙行。また当日は大会会長の外、南支部長田中藤作氏にも来賓として参列した。会は川野氏の司会で始められ、自己紹介のあと会則案審議、役員選出その他議事を進め支部設立に尽力した熊田忠雄氏からその経過を詳しく報告。

議事のあと大会会長は発会を祝す挨拶をのべ、そのあと引続いて懇親会に移り一同歓談して最後に全員万才を三唱、午後九時閉会した。

当日決定役員  
支部長 外山与治郎  
副支部長 長谷川稔、齊藤善三、川野政平  
幹事長 坪田吾一  
顧問 矢野芳雄、小松原敏

出席者  
福原喜寿美 赤川松雄 堀尾隆繁 木村雅昭 日蓮賢一郎 北出佐市 星田光男 田川実 今井芳雄 山本薫 武田孝志 増田義政 安藤易夫 芳野勝雄 岡野一市 新野ちか雄 山崎一幸 由本保 熊田忠雄 小西益太郎 増田司

大阪府庁秀麗会

大阪府庁秀麗会では二月八日(土)午後



大阪府庁秀麗会総会

二時から大阪市東区・国際見本市会館ホテルで総会を開催した。

当日は本庁、各分局その他から会員三百名が出席、非常な盛況であった。来賓として白川理事長、大会会長らも出席祝

辞をのべた。総会議事に入り、寒川支部長の挨拶、祝電披露、事業報告、会計報告が行われた。そのあと役員改選に移つたが銓衡委員を選んで協議した結果、支部長に寒川喜一現支部長を再選した。引続き懇親会に移り和やかに歓談、余興をたのしみ、学歌と道遥歌を斉唱して四時半散会した。

当日決定役員  
支部長 寒川喜一  
副支部長 西野健次、田中巧  
幹事長 吉田一郎

五十経会

五十経会では二月二十二日(土)午後から有馬温泉大鉄寮で一泊の総会を開催。一同和気あいあいの内に学生時代の思い出にふけつたり、意気揚々と会歌を合唱したりして愉快な時をすごした。

翌二十三日は色々と会員の相互扶助等について懇談、正午有馬を発つて帰阪、散会した。

当日出席者  
福野治兵衛 大野惟徳 唐川次夫 北本誠一 田岡隆 中村正日 俣正三 平沢農一 吉岡彰夫  
熊本支部

熊本支部では二月二十三日(土)午後一時から熊本市古城堀端町・料亭しま村で総会を開催。当日は会員十四氏が出席して開かれ、支部長吉田鹿之助氏が挨拶をのべたあと母校の現況を報告した。支部長の詳しい報告のあと、支部の事業、会計報告があつてから、小泉副支部長の後任選出について協議した。議事を終了してから一同懇親の宴を開き母校や校友の消息に話題の花を咲かせ、なごやかに会を閉じた。

昭和31年 校友名簿

在学時代の友を想うよすがに、  
また、卒業後の親睦連絡に、  
この一冊を備えて御利用下さい

— 収載人員二六、〇〇〇余名 —  
B5判 六〇〇頁  
実費頒価五〇〇円  
(送料当方負担)

申込先 關西大學校友課  
大阪市大淀区長柄中通二丁目  
振替大阪一二八七五番

# 關西大學七十年史

A5判 本文 七〇〇頁 特製上質紙使用

資料編 一五四頁 布クロス美装

口絵 五七頁 函入

## 内容目次

- 第一章 關西法律学校の創業
- 第二章 河内町興正寺時代
- 第三章 江戸堀時代
- 第四章 福島時代
- 第五章 福島、千里山時代
- 第六章 千里山及天六時代
- 第七章 新制大学の時代
- 資料編 (關西大学七十年史年表その他)

刊行 關西大學

「關西大學七十年史」は、關西大学創立七十周年記念事業の一つとして企画されて以来、修史に、編集に、遺憾なきを期して着々進められていたが、この程完成をみましたことは御同慶に堪えません。本年史御希望の方には実費金壹千五百円(送料共)にて御頒布いたしますから何卒、大学出版部まで御申込み下さる様お願いします。

刊行取扱 關西大學出版部

# 大阪周辺の村落史料

關西大學法制史學會 共編  
關西大學經濟學會經濟史研究室

A5判 フランス綴箱入

本書は關西大學図書館に所蔵されている貴重な村落史料のうち、庄屋文書といわれる庄屋の蔵に放置されていた記録を纏めて、法制史及び經濟史は勿論、一般史学やその特殊部門の研究に寄与せんとして公刊されるものである。庄屋文書のなかには、庄屋自身の任命、退役から、触、達、回状、農民の五人組、宗門改、検地、耕作、年貢、水論、新田開発は勿論、田畑建物の売買質入、奉公人、人身売買、縁組、相続、遺言、往来手形、寺送り村送り等に至るまで、百般の法律行為に関する文書までが保存されているので、近世農民の法律および社会經濟生活はこれらの史料によつて明かになるであろう。

第一輯 (庄屋文書) 既刊 二二〇頁 頒価 金四〇〇円

第二輯 (耕肥、拝借銀、頼母子) 既刊 一七〇頁 頒価 金三五〇円

第三輯 (証文集、村役人) 既刊 二二五頁 頒価 金四〇〇円

第四輯 (五人組帳) 印刷中 予定二〇〇頁

(なお御入用の方は大学出版部へ直接御注文下さい)

發行者 關西大學

發售所 關西大學出版部

大阪市大淀区长柄中通二丁目

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可  
昭和三十三年三月三十日發行(毎月一回三十日發行)

關西大學學報 第三二三號 三月號

編集兼 久井忠雄

發行所

關西大學出版部

印刷所

電話 堀川35(二〇七二番)

電話(35)七二七一